

2024 年度人文学部 FD 活動報告

(キリスト教学科, 人類文化学科, 心理人間学科, 日本文化学科)

人文学部では、昨今の入試制度の改革に対する理解深め、効果的な入試のありかたについて検討することを目的に、2025 年 3 月 11 日に人文学部主催 DF 講演会を開催した。長く南山大学に勤務し入試に関わる要職を歴任された浦上昌則氏（本学心理人間学科教授）に講師を依頼し、「多様化する入試に対応する：心理人間学科での経験から」という演題でご講演いただいた。講演では、本学科が過去に初めて試みた AO 入試や 2017 年より実施している特別入学審査（カトリック高等学校等対象）といったいわゆる「年内入試」における様々な取り組みの内容とその成果について、データに基づいた考察をご披露いただいた。そして、選抜方法としての入学試験で留まるのではなく、入学後の学びを支援する諸施策と連携して検討・実施することの重要性についてお話いただき、今後の本学部における入試改革および学生支援を検討する上で貴重な示唆を得ることができた。

次に、各学科においての主な取り組みを紹介する。

キリスト教学科では 4 月に新入生オリエンテーション合宿を実施した。学科の教員を紹介し、学科の特徴や魅力、勉強内容、学生生活へのアドバイスなどを教員と学生スタッフが新入生に語り、交流を持つことで新入生が充実した大学生活を始められるようにすると共に、学生指導にも役立てた。また 2025 年 2 月に「研究プロジェクト発表会」、「卒業生歓送会」、「次年度ゼミ説明会」を開催し、教員と学科学生との間の質疑応答、交流、親睦の機会を設け、学生指導に役立てた。また年度末には学科 FD 懇談会を開いた。

人類文化学科では、2024 年度の FD 活動方針に基づき、以下のような活動を行った。① 2023 年度から開始し「内部質保証委員会」からも一定の評価をされた「1 年生からゼミ選択をサポートする体制作り」として「1 年生向けゼミ紹介」を 2024 年度も継続して行い、さらにそれを発展させ、「2 年生向けゼミ紹介」を行った。②「学科アンケート」の総数を増やす方策を検討した結果、アンケートをとるプラットフォームを変えるのがよいのではないかとの意見が出て、2023 年度の Google Form で行った前年度（提出率 48.9%, 46/94）よりも、2024 年度の WebClass で作成した方が、アンケート提出率が上がった（提出率 61.7%, 76/123）。③学科 DP の再整備と学科科目の関連の検討は予定通り行った。さらに、④2025 年度において「哲学人間学領域」で 2 名の退職者が出て 1 名の新規任用人事を行う必要が生じるのに合わせて、「哲学人間学領域」でどのような研究をしているどのような人物像で人事を行うべきか、学科会議後に 5 回に渡って FD の議論をした。

心理人間学科は、①多様な機会をとらえて学生、授業の情報を共有すること、②新入生お

よび卒業生を対象とした学科教育にかかる調査活動を行うこと、③学科ディプロマ・ポリシーと学科科目との関連に関する検討を行うこと、④研究プロジェクトの指導体制について検討していくこと、⑤年々増加する教員の負担を軽減する検討を行うこと、を今年度の方針とした。

上記の方針のもと、学科会議および2泊3日での学科FD企画（心理人間教育研究会）において、FD活動を行った。方針①について、学科会議で授業や授業外での学生の状況を共有した。方針②について、学科渉外広報委員により調査と分析が行われ、その結果が学科会議および学科FD企画で共有された。方針③について、全学的な動きとして2024年度に実施された、ディプロマ・ポリシーと学科科目との関連を示すカリキュラム・マップを作成する過程において、学科としての検討を行った。方針④について、ワーキンググループで検討された副指導教員の指導体制の変更案について学科会議で決定した。方針⑤については道半ばであり、具体案が決定されるまでに至っていない。

日本文化学科では、今年度のテーマを「4年生の指導についての課題 共有と検討」とし、以下の6点について意見交換、対応策について検討した。

- (1) 生成AIの利用と対策について
- (2) 研究プロジェクトの取り組みについての各ゼミの状況の共有
- (3) 学生のIT技術について
- (4) 4年次ゼミでの個別発表と指導について
- (5) レポートのフィードバックについて
- (6) 研究プロジェクトに関して学科として共通して行うこと

1年次の基礎演習において(1)に対応してはどうかという提案があり、担当教員が検討していくこととなった。(2)については、ゼミごとにかかなりの違いがあることが共有され、(4)(6)の課題につながる議論が行われた。その結果、(6)については、口頭発表が研究プロジェクトに関して共通して学科行事として行われている状況に、研究計画書の提出を行うことを新たに実施してはどうかという提案があり、その方向で進めることとした。

(3)については、ワード、エクセル、パワーポイントなどの指導について課題が共有された。

(5)について、出しばなしになっている状況を改善する方策として、ゼミに関しては次年度の初回到返しているなどの実施されている対応が示された。